

【症例ローラン】〔女兒、年齢：治療開始時7歳6ヶ月〕

於・The Tavistock Clinic, Dep. for Children and Parents,
120 Belsize Lane, London, NW3 5BA, ENGLAND

- ・主訴；学習意欲の低迷。全体に覇気が乏しい。未熟な印象。祖母のGP(家庭医)からの紹介。
- ・家族背景；ユダヤ系。母親はキャリア志向。ファッションデザイン関係。子育ては母方の祖母任せ。父親は自由業。妻には理解がある。ローランの妹ナオミも同時期に治療を受け始めた。

■資料その1；ローランの治療経過についてのレポート（日付；1978年12月23日）

ローランは、祖母の掛かりつけのGP(家庭医)を通してタヴィストックに紹介された。その理由は、彼女の学習成績が芳しくないこと、そしてこの年齢にしては覇気が乏しく、全体にどうも幼稚で未成熟な印象があるということだった。ローランの生育歴について詳しい情報を親たちから得ることはできなかった。というのは、母親がローランを出産した後すぐに職場復帰し、それ以来ローランの養育は母方の祖母の手に委ねられていたからである。どうやらローランは、2歳半頃から心身の不調が目立つようになったものとうかがわれる。外来の受診が頻繁になっている。しつこい咳、発熱、時折の軽い喘息発作、夜尿、不眠など。他には、蜘蛛がトイレにいると怖がるなども報告されている。

学童期に入ったとき、彼女は4歳半であったが、学校からの報告によると、授業中彼女はしばしば疲れた、しんどいと訴えることがあり、見るに見かねて担任の先生は彼女にくしばらく眠ってらっしゃい>と言って眠らせておくことがあったそうだ。時折彼女は自分だけの世界に閉じこもり、絶え間なく指しゃぶりに夢中になっていて、そうした状態ではほとんど外からの呼びかけに応えることがないので、聴覚障害の疑いまで持たれたとのことだった。

ローランは、Dr. Trowelとセラピーを2期間(ターム)継続していたが、その後わたしが引き継いだ。治療開始後1年3ヶ月ほど経過している。週一回のセッションである。その概要をここに述べよう。

※秋から冬の期間；1977年9月29日～12月22日

ローランは年齢が7歳半で、ぶっくらした体格のいい女の子で、いつも身奇麗な恰好をしていた。しかし目の辺りに影がうかがわれ、どこか悲しげなのだった。彼女が初めてわたしと会ったとき、全然気後れするふうでもなく、一見平然としているのだが、ほんの少し不安げで緊張しているようにもうかがわれた。わたしに関わることには何ら問題はなかった。自分の問題についてわたしに率直に語った。お腹のなかにしつこい何か妙な感じがいつもあって、気になるのだという話をする。<今それを感じないんだけど、夜になるとそうなるの。ママは、あら、そんなものはすぐになくなっちゃうわよ・・>と言うんだけど。ママの言うことは間違ってる。決してなくなりはないの。そこにずっと居ついている感じなんだもの・・>と語った。

それから彼女は別の話をした。「魔女」が空を飛んでいる。そして<ローランを捕まえて、それで夕餉に食べちゃおう>と歌っているんだとか。そこで彼女は、夜中ベッドの下に身を隠していなければならぬんだとか…。それらの他にも「蜘蛛女」の話をする。彼女は家のなかにたくさんの蜘蛛を飼っていて、誰かが尋ねてこようものならば、脅かして寄せ付けないようにするんだとか…。

ここに、彼女の空想において迫害的人物の‘糞便的な’クオリティーがうかがわれることから、わたしは彼女が誕生後ずうっと慢性的に腸内にガスが溜まっていた、つまりゲップがうまく出ないとか、或いは便秘といった問題のあった子どもではなかったかと思つた。彼女は誕生後6週目で固形食に導入されたと報告されていることからしても、その可能性は充分あろう。その最初は身体的なものであったろうが、それとともに迫害的な痛みやフィーリング、そして‘内なる糞便的なオッパイ・ママ’のイメージが伴っていったものかと思われる。彼女の訴えには事実リアリティーがある。ここで彼女の内なるフィーリングもしくはいかなるメンタルなイメージ、それが良いものでも悪いものでも無差別に、とにかく排泄する(排便すること)すなわち空っぽにすることがローランに切実に求められていることが特記されよう。そして彼女の心的構成において、一見してコンテインメント(包容する器)が欠如しており、また「トイレット・オッパイ」の取り入れも機能不全であることがうかがわれる。それ故に、ローランが無感動(しらけ; apathy)もしくは消耗感・疲労感を慢性的に起こしているものと推量される。それが特にわたしにとって注目すべき点かと考えている。

時を経ずして、彼女の抑えこんでいた、秘めた絶望感、そして養育上の剥奪及び無視など(特に口唇愛的なレベルのニーズ)をめぐって悲嘆の幾つかがわたしにも理解できるようになってゆく。それらは、例えばゴリラについて彼女が語る物語からも充分うかがわれた。彼女は、よくゴリラと同一化して自分を語ることがあるのだが。まずその一つは、粘土 plasticine の大きな塊かたまりを使って、彼女はこんな物語を語っている。火山がある。そこから溶岩が溢れ出ている。そしてゴリラはその火山の下の洞穴に入ってゆき、<おれは獲物が欲しい！>と大声で喚くわけなのです。そしてそこにいた蝙蝠わめやらカメやらを手当たり次第に掴んでばりばりと食ってしまうわけです。こうした物語からして、彼女の「オッパイ・ママ」がその下半身の‘お尻’へと転化されていて、「糞便=内なる赤ちゃん」を抱え込んでいるといった、実に肛門愛的性質を帯びているということがうかがわれる。

二番目のお話とは、ゴリラが人々を川に人々を投げ込むというもの。<なぜならば村落にあまりに人がいっぱい過ぎるからなの。それに彼らは皆とっても邪悪なひとたちなんだもの>と、彼女は語る。或一人の訪問者がその村落に訪れた。でも彼らは彼女を家の中に入れようとはしない。扉には錠が掛かっている。彼らはちゃんと家の中に居るのに、わざと居留守を使っているというわけ。そしてやがて彼らが彼女を中へと招き入れたとき、彼女は<お腹がぺこぺこよ。スープをいただいでいいかしら？>と尋ねる。するとママはどうぞと言うが、パパは、机の上にあったそのスープ皿をひっさらって、横取りしてしまう。なんて性悪な人たちなのかしら…と彼女は嘆いてみせる。かくして、母親の「内側 inside」、そこに抱えられている子どもたちへの羨望、またそこに居座る父親像に対してのローランの警戒心やら敵愾心は熾烈であることがうかがわれる。

ゴリラとの同一化から察するに、その猛烈な貪欲さそして冷酷非情なる破壊性といったことからしても、ローランにとって自分に与えられたものを良いものとして活用したり、保有することは到底望めないということになりましょう。彼女には強い思い込みがあるかと思われる。すなわち、それは彼女が今目の前にしているものは決して次の機会まで待っているなどあり得ないということ。そこで彼女にとって唯一考えつくことは、それを今ここで全部使い尽くしてしまうこと。事実、彼女はわたしがセッションのために準備するもの、画用紙、セロテープ、のり、紙ティッシュなどをそのように浪費してしまうわけで、その無駄遣いの凄まじさ、猛々しさには実に啞然とさせられるほどなのだった。例えば、流し台でわざわざ紙タオルを何枚もビシャビシャに水浸しにし、それらを丸めて握りつぶし、さらにセロテープでグルグル巻きにするといったこと。勿論何の意味もあろうはずはなく、さっさとゴミ箱にポイ捨てされるのだったが…。だが、意味があるといえはあ！それが象徴的には侮蔑と嘲笑に彩られた、尿道愛的攻撃で徹底的にいたぶられた「オッパイ・ママ」であるということだろう。それを‘役立たず useless’にすることが彼女の狙いであり、そこに情け容赦はない。

さらには、彼女が使いつくしてしまったものの代わりに別の何かもたらされるとき、彼女は全然それを喜ぶことはしないのだ。なぜならそれは彼女がまだもらっていないものがあるということをおぼせるからであり、そしてわたしが‘よきオッパイ’であり、それはよき養い手であるところの父親と一対(カップル)になっているなどと考えることは彼女にとって耐え難いことなのだ。そしてこのようにして触発されたところの羨望と嫉妬心は彼女をして一層のこと「父親(ペニス)像」に向けて、そしてその母親との関係性に情け容赦のない破壊欲(糞便的もしくは尿道愛的)の矛先を向けることになる。それは、例えば「腐った木の株」です。<木の上のほうがなぎ倒されたの。どうしてかという、つまり水浸しになって、腐ってしまったからなの。それで切り落とされたってわけなの。>と、彼女はそれについて語っている。もう一つ、他にも似たような話では、彼女は粘土で‘花’を作っていて、そこに‘茎’をも付け足そうとした。だが、すぐさまそれらを握りつぶしてしまう。<強風と雨で‘茎’がなぎ倒されてしまったから、もはや‘花’を支えられないの。>と、彼女が語った。ここに「結合的両親像」、その繋がりへの猛然たる破壊欲がうかがわれる。

クリスマス休暇に入る直前のセッションにおいて、ローランはサンタクロースに扮した。でも白いひげの代わりに敢えて‘黒いひげ’を付けます。これはわたしにクリスマスプレゼントとしてチョコレートの箱を持参してきたこととも関連づけられましょう。すなわち、彼女は「糞便的な父親ペニス fecal Daddy-penis」になろうとしていたのでしょう。それでわたしの「内なる赤ちゃんたち inside-babies(お家の子どもたち)」をめくちやくちやくにするといった秘密の任務・ミッションをどうやら有していたものと思われる。詰まりのところ、<Fuck you! (‘クソ喰らえ!’)>といったことでしょう。

ところが、その後彼女が語ったところによりますと、どうやら彼女自身が両親のカップル、彼らの「肛門愛的性交」へ向けての彼女自身の肛門愛的な侵入そして攻撃欲の故に「犠牲」にされるといった羽目

に陥るようなのであります。クリスマス休暇を迎えたセッションにおいて、或る男の子の人形が山の天辺（粘土の塊）に向かって歩いていただけですが、彼は途に迷ってしまいます。そしてなぜかローラン自身にも説明できないのですが、その山上にあった穴に彼は吸い込まれてしまう。＜ママー！＞と悲鳴のような叫び声をあげながら…。こうした悪夢はまさに、わたしが（転移上）彼女のころのうちではその投影の結果として、「糞便的オッパイ」もしくは「糞便のお尻・ママ」になってしまったこと、そしてローランは自分の仕掛けた罠に自ら嵌まったといった具合に、そこに足を掬われてしまって身動きが付かないことになっていることが例証されている。そこに幾らか冷笑的な気分があるとしても、悪夢的であることに代わりはありません。ここで「糞便的な父親ペニス fecal Daddy-penis」がまったくのところ、何の役に立たない useless ことが実に致命的なわけです。ここにローランの根深い絶望感があるといっていいいでしょう。だからこそ、＜Fuck you(クソ喰らえ)！＞と叫ばざるを得ないのでしょう。

さらには、彼女の絵ですが、「太陽が‘ring ring roses’を歌っている」というものでした。それも「^{はさみ}鋏」と一緒に歌いながら遊んでいるわけです。彼女の物語では、＜太陽が大きな鋏を次から次に呼びよせるわけなの…。でも赤ちゃんの鋏はダメなの。置いてきぼりにされちゃってるわけ…。＞そしてこのゲームの最後の詩句 <tissue tissue, all fall down…>を歌いながら、彼女は床にお尻をデンとぶつけて座り込み、なんだか上機嫌になります。それからクレヨン^の先っぽを鋏で削り取るといったことに熱中しました。ここにローランにおいて特徴的な「自慰空想」の耽溺を見ることができます。つまりは、罪悪感と迫害不安に恐れおののく自分をむしろ嘲笑するかのよう、「躁的防衛」の応酬に出たもののようです。すなわち「両親の良き性交 good intercourse」は、もしもここに例証されているように、‘太陽(母親のオッパイ=お尻)’と‘大きな鋏(父親ペニス)’の組み合わせだとしたら、当然そこには不穏なものが漂うわけであり、そうした彼女の自慰空想においては、お互いを切り刻むやら痛めつけるといった悪しき性交 bad-intercourse に転換されるのであります。母親オッパイと父親ペニスの「結合両親像 combined parental figures」は、今や肛門愛的性交に彩られたヴァギナ(鋏)とペニス(クレヨン)との結合両親像となり、揶揄され愚弄されるといったことになりましょう。ここに「口唇愛的サディズム」がうかがわれます。つまり‘口’が‘ヴァギナ(性器)’へと転位され、猛威を振るっているということであり、それはまた彼女が日常的に耽溺する‘指しゃぶり’(もしくは自慰)の心的背景としての「自慰空想」のあらましとしても考えられます。

※冬から春の期間(1978年1月5日～3月23日)

この期間、ローランに目立ったことといえば、彼女が或意味で早熟ともいべき自立をめざして躍起になっていたということです。セッションにおいても、またそれ以外の場でも彼女は得てして攻撃的になりがちでありました。どんなに何かを欲したとしても、容易に彼女にとっては欲求不満に陥りがちで、それで激しく怒りを爆発させるといったことになるわけです。であれば、いっそのこと何も欲しがらないのがいいと決めたかのようでありました。妹のナオミは彼女のことを母親が不在な折など「大きなマミー(Big Mummy)」と呼ぶのですが、なぜそうであってはならないのかと彼女は思うわけです。実際に母親が居るときには、ローランはナオミにとっては‘小さなマミー’でしかなく、それについて彼女はひどく心証を害して

いるわけです。確かにローランに幾らか自己主張 self-assertiveness が見え始めたということがわたしにも気づかされました。そこには尊大だったり、高飛車で意地悪っぽかったり、我を張ったりといったことも認められるのでありましたが・・・この時期彼女がセッションの外でも、攻撃欲が猛然と吹き出したということが報告されております。まったくのところ、‘空手ガールのローラン’は秘めた抑うつ感と死に物狂いで闘っていたといえましょう。

彼女は、「タヴィストック」の建物の最上階には子どもの病棟があって、そこには入院している子どもの患者たちがいるといった考えに痛く固執しておりました。さらには、その屋階に予備の玩具類がいっぱい保管されているんだそうな・・・！自分が週一回だけの外来患者であることを^{みじ}惨めに思う気持ちをどうにか払拭しなくてはなりませんでした。彼女はこんな夢を語っております。一匹の幼いクマさんがお店に「クリスマス」を買いに行ったとか、だけどサンタクロースがくれたのは冷たい吹雪でしかなくて、それで彼はくぼくには何も無いんだあーと泣き喚いたといったことです。これは、母親の内側 inside の「父親ペニス」への非情なる冷淡な攻撃と関連性があるものと思われれます。彼女は「紙だんご」といったものを創りました。それは濡れた紙タオルのグジャグジャ握り潰された塊りなのですが・・・そして彼女は、くそれを箱のなかに入れておいたらどうかしら。そしてそれがどんなふうになるのかお楽しみよね。どんなものになるか、わたし知ってる・・・(ニヤッと笑う)雪だるまよ・・・>と言いました。こうした‘偽善者 hypocrite’である彼女が、自らの惨めで怒り狂った涙を始末するのに、どんなことをしたかという、ありったけのティッシュペーパーやらペーパータオルを水でビショビショに濡らして、口ではお部屋をきれいにしなくちゃねとか、壁をきれいに塗り替えなきゃ・・・と言いながら、でも結果的にはそれは部屋中の壁を汚しまわって散々に取り散らかすといったことなのです。そもそも‘ガールスカウトのローラン’がどれほど有能かということ誇示する意図が彼女にあったはずなのに、結果は見事にそれを裏切っている！この時点で彼女は‘シェルター’とか‘コンテインメント’を必要としていると自らのニーズについて幾らか気づきがあったかと思われるのですが。例えば或る日、自分が描いた「ピンク色のお母さんカンガルーの絵」をポケットに入れてセッションに来まして、それはわたしが当時着ていたピンク色の縁で飾られたポケットの付いたグレーの服とどうやら関連づけられるようでありましたので、それを彼女に告げますと、それを即座に否定し、そしてくわたし、外だって大好きよ。路上の水溜りを足でピチャピチャさせるなんて大好きだもん・・・>と言いました。足を床に踏みつける動作をしながら・・・わたしはここで彼女のなかにある‘内的な母親対象’への根深い不信感を感じたのです。それは彼女の荒れ狂う、取り散らかった厄介な感情を整理し得るだけの忍耐力を持たないということです。だからそれは侮蔑でもって斥けられてしまう、つまりローランにとっては‘役立たず’で要らないものにされるわけです。そこでどうやら彼女のなかの「男の子の部分」は父親との同一化へと舵取りしてゆくようでした。それも或る意味「母親オッパイ」を巡っての父親との密かな競合にもなりましようけれども・・・。取りも直さず彼女にとって「父親ペニス」が「根腐れた木の株」のように侮蔑され愚弄された‘役立たず’ (impotent) ではもはやなく、何かしら覇気やら生気をもたらすもの (potent) として取り込まれてまいりました。10歳になったら、乗馬の騎手になるんだという野心をローランは語っておりまして、それは大いに結構なのですが、その万能感的な空想から彼女にとってモノだけではなく人もまた消耗品だということがよくわがわれます。彼女の貪

欲さは敢えて言うならばpromiscuous(淫乱!)で、つまり誰でもいい、使えれば!といったことです。例えば、セラピストというのも‘騎手ローラン’が乗る馬のようなものであります。彼女はレースに出場し、それで優勝カップを手にするといったことしか考えませんから、もしも馬が使い物にならなくなれば、さっさと売り飛ばしてしまえばいいわけで、そして新しいのをまた買えばいいということになりましょう。それで彼女という‘皮肉屋さん’のなかでは、もしも両親が賄えるものならば、(服や物と同じく)新しいセラピストだって悪くないということになりましょう。それだから、Miss Yamagamiに愛着しなくてはならないといった気持ちは一切無視することに決めたようです。それは往々にして幻滅することがないとも限らないからです。事実セッションがキャンセルになるやら遅刻して来ることなどがこの頃頻繁にあったわけですし、しかしそれについて言及されると、彼女の返答はく何よ、そんなこと気にしないわよ。わたしが気にすると思うの?全然よ。ほんとうに・>というわけでありまして。そしていかにも馬鹿にしたふうに笑うのです。

さて、復活祭の休暇が近付いた折、彼女は‘ダイエット’することに決めたようであります。つまり「欲しくなんかないもん!」を誇示するということ。例えば、セッション中に持参した漫画本を読み耽るといったこと。それに、彼女の切り絵細工です。道化が4つのボール(オツパイ??)を使ってボール遊びをしていました。だが直に彼の腕は短く切られてしまうのです。長すぎるといった理由で・!彼女の「男の子の部分」がどこか「去勢不安」に脅かされているかのようでもあります。それも妹のナオミのセラピストの事情で、自分のほうがセッションをよけいにもらえるということでナオミの報復を恐れたともいえます。しかしこうした「オツパイ母親」への口唇愛的貪欲さをどうにか制御せんとどれほどどう頑張っても、うまくいかないのです。例えば彼女は、夜更けにお腹のすいたネズミが台所のあたりをうろろろするといった話を語ります。それは漫画の本からのネタではありましたが・。

※春から夏の期間(1978年4月6日~8月3日)

復活祭の休暇を終えて、ローランは自分の傷つきやすさとか抑うつ感、そして自分の‘素の感情’といったものにどうやら触れられるようになってきました。それは、例えば彼女のお話にあった、カタツムリが殻のなかに引っ込んでしまう、なぜって寒いもんだから・といったことに表れております。そして転移上わたしが妊娠している母親となり、その内なる赤ちゃん(inside-baby)に対しての敵対的な嫉妬心やら競争心に煽られるといったことが顕著になります。外的現実としては彼女の担任の先生が妊娠中であつたということがあったわけですが・。ローランはわたしに言います。<迷子になった狼の子どもになんか連れてきたりしちゃダメなのよ。お母さん狼がやってきて、先生のこと、噛み殺すわよ>ということです。彼女の以前の担任の先生方について彼女が溜め込んだ怒りがあるのは明らかでした(事実、既に4人もの担任が産休のため去つたと報告されております!)彼女が言いますのは、いつも出産後自分の赤ちゃんを見せに彼女らが教室に姿を現すんだとか、ハローと言いに・。ローランがどんなに傷ついているか彼女らはまるで無頓着であること、その無神経さをローランは非難しているわけでありまして。彼女にしてみれば、自分の担任の先生がいなくなるということは、愛情と関心がすっかり根こそぎに奪われる体験なのですから、手酷い痛手



に思えるのです。その傷つきと怒りは、お家の絵がメッタ切りにされることに表れております(図例; 1978/04/27。)やがて夏季休暇が近付くにつれ、それは彼女が一年前にDr. Trowelとのセッションを終了した時期とも重なり、その別れが辛く蘇るということでありましたから、わたしたちの関係ももうじき終わりになると決めてかかっていたようであります。それにわたしがこの時期彼女の両親と面談を予定しておりましたので、セッションの打ち切りについて取り決めがされると彼女は思い込んでいたのです。そうした大人たちの勝手な取り決めで彼女は憤るのです。面談から仲間はずれにされたことで、くわたしにだって、言いたいことはいっぱいあるんだからね・・・! >と悔しそうに吠えてみせます。そこで彼女はセッション中に持参した漫画本に夢中に読み耽っているふりをして、他のことなど一切頭に入らないといったふうを装うのでした。そしてわたしの言葉掛けを断固耳にすることを拒絶したことになります。そのわたしが語る言葉というのは、つまりは実際のところ‘親なるカップル’の話し合いということになるわけです。それで窓を開けて、外の騒音が部屋に飛び込んで来て、わたしの言葉掛けが掻き消えるように工夫したりしました。この時期、彼女は始終両親に耳が痛い ear-ache と訴えております。その理由として、彼女が両親に語ったことというのは、<だってね、Miss Yamagamiがわたしにとっても悲しいことばかり言うんだもの・・・>ということでした。それは実にそのとおりなわけですが・・・。

休暇が近付くと、彼女は恰も‘巣立ちする小鳥’のようでありました。両親との絆はそれで永久に終わりというわけでありました。彼女は一つお話を作りました。それは年老いた男の人で、百歳なんだとか。それで妻を亡くしたのだそうです。それで庭に彼女の遺体を埋めました。その二日後に彼も亡くなります。それでその彼の愛した死んだ妻のお墓の傍らに埋められたということです。ご丁寧にもわざわざその絵はわたしに進呈された。「For You」と書かれてある(図例; お墓「dead your wife」1978/07/13)。その一方でローランはとてご機嫌なムードでした。Bournemouthに家族で旅行が計画されていたからです。それについてお喋りしながら、彼女は紙でランプの傘を作っておりました。それは彼女自身のために一つ、もう一つは彼女のボーイフレンドのウイリアムのために一つのものでした。やがて彼女のころのなかでは、彼らはまるで新婚旅行に出掛けるカップルのようになりません。<親たちは一緒には来ないのよ。だって彼らが来たらわたしたちのハニームーンが台無しになっちゃうんじゃないかって気遣ってくれてるわけ・・・>と言います。確かに彼女はわたしをまるで使い捨てされる‘汚れて古びた母親’にしております。それは古いランプの傘というわけで、その内には古くて消耗してしまっただけという事になります。彼女にさっさと見切りを付けられ、反古にされるといったわけです。それでこの娘なるローランの輝くような若さと美貌とその将来の性的な高揚といったことをただ羨望のまなざしで仰ぎ見るといったことのようにあります! この「大きくなったお姉ちゃん」のローランはわたしが去るとしても一滴の涙も流さないと心を堅く決めているようでした。ここに根深いペシミズムそしてネガティヴズム(反抗癖)が潜在しているのは紛れもない事実であります。



※秋から冬の期間(1978年9月7日～12月21日)

確かにこの頃になると、彼女の様子は変わってきました、覇気も出てきたようですし、やる気もそこそこ見られるようになりました。顔の表情も明るくなってきております。しかしながらどうも全体にいかにも思春期特有の「わたしは大きなお姉ちゃん big-girl なんだから」といった素振りが見え隠れします。(例えば、いつも彼女が持ち歩いているハンドバックにはクレヨンとかカラーペンとかがごっそり入っていて、そこ



にお金やら香水瓶までも・・・といったところですよ。)それはどうやら担任の先生の妊娠と産休が間近であることと大いに関連がありそうです。彼女はわたしが休暇中に赤ちゃんが出来たのじゃないかとしきりに気を揉んでおります。浜辺からかなり距離のある孤島の絵(図例; 1978/09/14)。そこには洞穴があり、浜辺にいる一人の男性がデッキチェアに座りながらそれを

眺めているといったもの・・・)そして彼女はどうやら混乱し心掻き乱されている感じなのです。或る意味、ここで彼女が自慰に耽っていたことは認められましょう。例えば一枚の用紙の下に銀貨を置き、そこにクレヨンを押し付けてこするとといったことです。これはまた、彼女がわたしのお腹をさすり、そこに何か居はしないかどうか確かめるといった意味でもありましょう。わたしの「次の子ども」に対する強烈な敵愾心は彼女の飽くことのない口唇愛的貪欲さとともに、もはや隠しようのない事実であります。(例えば、色紙を使ってパターンをつくるといいながら実際にはメッタ切りに切り裂くやら、彼女のタイツに穴が開いているのを指し示しながら、犬が噛んだからなのよと言ったり、それはナオミが彼女の寝室の扉を開けていたせいで彼女を咎め立てするやら・・・)それから彼女はあることを想起しました。それはかなり前のことだけど、犬にテディベアをあげたんだそうです。彼がそれを欲しがったからですが。するとなんと犬がそのテディベアの足を引きちぎってしまったのです。それでローランがあとでそれを修理する羽目になっ



たんだとか。それっていつなのと訊くと、<わたしが6歳で、ナオミは産まれたばかりだったわ>と答える。もう一つ、丘の上にお家があって、その脇に小川が流れている。そこに棲むお魚さんの話。<そこらにある水草をがつつ食べるの、根っこの部分すらもほじくって食べちゃうわけ。それで水草を求めて、別のところに泳いでゆかなくてはならなくなったのよ>。そして、風船を持つてる男の子の絵(黒い髪の毛だから日本人かな?)。その上を殴り書きで痛めつけ、その後ゴミ箱にポイ捨てしてしまう(図例; 1978/11/08)。この折、母親がイスラエルへ一週間ほどの旅行が予定されていたの

だが(静養が必要だといった意味だとか)、またわたしのクリスマス休暇も、彼女の心の内では‘もうひとり別の赤ちゃんを儲ける’といったことを確信させるものであり、ローランにとって‘見捨てられ感’が募ったのでありました。例えば彼女は祖父母から聞いた話、すなわち子犬たちを売ること孤児たちの基金を集めるといったことを語っております。<頭の上に屋根がない(つまりホームレス)ということがどういうことか分かる??>と、彼女はわたしに訊きます。そしていかにも同情に耐えないといったふうに、彼女のお小遣いから10ポンドを寄付したことを付け加えました。あらどうして?とわたしが訊くと、<もしあなたがユダヤ人ならば、ユダヤ人であるってことがどういうことを意味するか判ると思うんだけど・・・>と応え

ます。(つまりMiss Yamagamiはユダヤ人じゃないのだから、ユダヤ人であるということは決して分かりっこないと言われているわけだ!) <われわれはキリスト教徒とは違うの。われわれにとってクリスマスとかあんな単なるゲームを全然好まないわけ・・>と、彼女は決然としたふうに語る。そしてここで、「死に掛けた黒い花」とか「黒い羊」とか、そして丘の上の家には年老いた夫婦が農場を営んでいて、そこには「赤い蜘蛛の太陽」が輝いているといった絵を描いたわけですが、そこには彼女の隠れた抑うつ感が表れております(図例;1978/11/16)。しかしながら、ローランは抑うつ^との痛苦やら涙なぞ一切見せまいとして必死にこらえているのです。



そして或る話。彼女が母親にキスしようとして抱きつくと、母親の着ていた服に付いていたケシの実の棘^{とげ}が彼女を刺したということでした。<ママが言うのよ。大丈夫って・・。何ともないって・・。ほんと、何ともないわ。たとえ指にちょっと傷がついたとしても、何ともない・・。大きくなるってことはそういうこと。何だって何ともないって分かってゆくことなんだわ・・>と賢いげに彼女は語る。しかしながら、彼女の傷つきと痛みは別の捌け口を見つけなければならないのです。例えば、お家の絵。その窓が黒い手袋をした一人の男によって破られ、侵入されたのであります。また、彼女はセッションのなかで「移動遊園地 fun-fairs」ということで、車をぶつけ合わせることに大いに興じたりしました。彼女の抑うつ感、もしくは悲哀、もしくはこの「傷ついた母親(=家)」への思いやりからでしょうか、注意を父親へと向けます。(この時期、学校で男の子らとの間にいちゃつきがあると報告されている。それらの一人と彼女が婚約したと言う話も・・!)そして、セッション中、わたしに背を向け、窓の敷居に立って、これみよがしにお尻を振り振りした。なまめかしく誘う感じで・・。<わたし、ほらね、ロボットみたいでしょ・・>(窓の外に見える駐車場で父親が車のなかにいることを充分意識していたのは間違いない・・。)でも、彼に向けての性的な感情はどこか疚しく思えたということはあるようだ。例えば、彼女は金魚が一匹死んだ話をする。<私、すごく悲しくてうんと泣いたの。それをお祖母ちゃんにあげちゃった。だって欲しいって言うんだも



の・・。でもね、お父さんがわたしに金魚を2匹買ってくれるって言うのよ>とローランは機嫌を直す。この時点で、彼女は嬉しさで小躍りせんばかり・・。このように「魅惑的な母親のお尻」への彼女のこだわりは侮蔑と羨望の入り混じったもの。きらびやかで誘惑的な美女(人気のポップシンガーだとか)が描かれたその画用紙の裏側には豚の絵がありました(図例;1978/12/06)。彼女の解説は、<あなたの半分は豚、その半分はあなた自身である(You are half a pig, and you are half of yourself)とのことだった。<あらまあ、彼女お気の毒ね!>と冷笑的・・。こんな具合に「豚・マミーPiggy Mum」を嘲りながらも、しかしながら、幾らか知らなくもなかった「親たちの性交」についての好奇心、そして殊に「父親ペニス」への憧れはますます



す募ってゆくばかり…。それで幾らか侵入的な‘覗き peeping-in’が見られる。例えば、彼女は粘土で‘水蛇 water-snake’を作った。<わたし、草っぱらにいた蛇に触ったことがあったわ。男の人がいて、蛇を探していたの。それを手に持ち上げて、わたしに触ってごらんというのよ…>と彼女が言う。どんな気持ちだったの？と訊くと、ちょっと怖かったわ、と彼女返答する。そこで何やら性的なセッションを覚えたものか、彼女は寝椅子にからだを丸めて横になり、指しゃぶりを始めた。そして10分ほどセッションが終わりになるまで、彼女はそのまま眠りに就いた。それがクリスマス休暇でセッションがお休みとなる前のセッションのローランであった。

休暇を終えてセッションに戻ってきて、ローランが何やら一生懸命自問自答しているようすが目に止まった。親たちの心のなかに自分のためのスペース(居場所)があるということをどうしたら信頼していいものやら、新しい子どもたちが彼女の後から次々にやってくるというのに…！そして、大きくなるということは必ずしも、愛情とかそしてあれやこれや世話を焼いてもらうこと、それらすべてを失うということではないということはどうわきまえたらいいのか…と。例えば、彼女はこんな「指遊び」をした。母親が子どもらにさよならのキスをする。そして赤ちゃんを連れて、彼の衣類を買いに出掛ける。父親も彼らと一緒にいる。ローランが言う、<大きい子どもはお家でお留守番なのよ。気分は最悪。悲しくて…。だって何もすることないの。一緒に遊んでくれるママがいないんだもの…>。それから、彼女は自分を元気づけさせる。<彼らは知らないの、親たちが彼らにプレゼントを買ってくれていることを。それはクリスマスまでどこかに隠してあるってわけなのよ…>と。ところで、担任の先生が出産後に教室に戻ってきた姿を見て、彼女はひどく困惑したようだ。そしてセッションでひたすら彼女は指しゃぶりに耽っていた。それから彼女は語る。<夜に雪が降って、それで朝窓の外を見ると、まるで全世界が白いシーツに覆われたみたい。それに樹木にも白い綿が被っているの…>。どんな気持ちなのかな？<…わたし、坂道で滑って転んだの。それで坂の下までそのまま転がり落ちたのよ…>と返答する。それから8人も子どものいるご婦人のことを話題にした。いつもくるくと忙しく育児やら家事に追われているんだとか。そしてローランは、この活動的で覇気溢れる母親になった！子どもたちを学校に見送ってから、お祖母ちゃん宅に立ち寄って、一緒にちょっとお茶を飲みながらおしゃべりをし、それから買い物を済ませ、帰宅して赤ちゃんに「いないいないばあー」をして遊んであげたりするといったこと。ここに彼女のフィーリングが幾分肯定的なものになろうとしていることがうかがわれる。この母親がTescoで買い物をしているとき、彼女は「キャンベルスープ」缶を買おうとします。ローランが<キャンベルスープの好きな人は誰？わたしよ！>と嬉しげに叫びます。そこで彼女は母親のこころのなかに幾らか自分の居場所があるということを思い始めているということでしょう。忘れられずにいる、覚えてもらっている…。たとえ彼女が不在と一緒に居ないとしても…。それは、言うなれば信じるかどうかの問題なのだし…。ローランはようやくここで<わたしがもらえるものがあるとしても、それは私が欲しかったものではない。私が欲しいものはいつもどこか別のところであって、別の誰かがそれを物にしているの…>といった永年の積もり積もった恨みを片付け始めたのかしらと思われた。

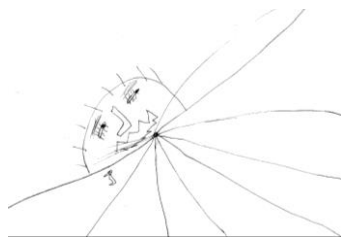
Chizuko Yamagami

■資料その2;ローランの治療経過についての総括（日付;1979年9月30日）

わたしがローランを見始めたのは、1977年9月であったわけだが、その印象は‘萎れて生気のない草花’で、もはや根腐れを起こしていて、育ちようがないといったものであり、そのイメージからして、養い手としてのわたしはかなりの間今一つ気持ちが奮い立つことがなかった。彼女のその「根腐れの部分」、それはお腹のなかに「しつこいイヤなもの bug」があると彼女も折々に訴えたわけだが、それこそが過去2年間の彼女の治療において問題とされたものである。総括すると、彼女の「欲する思い」を巡っての葛藤・反目であり、もしも敢えて彼女の気持ちを言葉にすれば、<欲しいって思うってどういうこと？それにどういいういことがあるわけ？そもそもなぜわたしは欲しいと思わなくてはならないのかしら？わたしが欲しいって訴える前に、誰もが皆それをもらっているじゃないの？なんでわたしだけがそれを欲しいってお願いしなきゃならないわけ？それってフェアじゃないわ！ 皆誰もがすごいケチだし意地悪なのよ。ひどいんだから・・・>ということになる。

実際のところ、彼女はセッションごとに根こそぎにされる (uprooted) といったふうで、そして次のセッションまでの一週間というのはとても待てず、再びわたしと一緒にセッションに戻って根を下ろしてゆくということがひどく困難なのだ。さらに「次のセッション」などというのは、ローランにしてみれば、絶対に保証されてはいないわけです。最初の1年の間というもののセッションがキャンセルされることがしばしばあり、それもいろいろ事情があつたが、ローランはセッションへの帰属意識を持つこと、そして「コンテナ」としての Miss Yamagami に信頼を寄せるとか、それを自分のものとして感じられるといったことには随分と手間取った。そしてごくごくゆっくりとためらいがちなが、徐々に彼女はわたしとの間に‘アタッチメント’を育てていった。それは同時に、それがどういう代償を払うものかに耐えてゆかねばならないことになりす。すなわち、わたしの「いなくなること(喪失)」の苦痛に耐え、そしてわたしの不在を巡って彼女の不信に満ちた報復的な気分をどう克服し得るかといったこと。大いに煩悶と葛藤を重ねたのです。

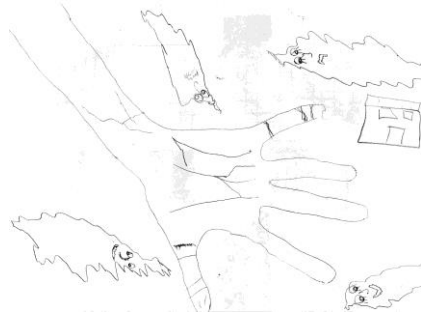
それは、次のようなことに例証されていましょう。ローランは‘小川’の話をしていました。丘の上の一軒家の傍らに流れているのです。その小川では人々は泳ぐことができますが、でもお魚さんたちは



泳げません。というのは、人々が水草を踏みつけてしまったからです。水草はお魚さんの餌なのですが、彼らはそれとも知らずに踏んづけてダメにしてしまったのです。すぐに彼女が付け足して言うには、<お魚さんは水草を食べるんだけど、その根っこまで食べちゃうわけ。だから流れを泳いでいって餌である水草の生えている別のところへ移らなくてはならないわけなの・・・> (1978/10/12)。ローランは復活祭のお

休みの前に「夕陽」の絵を描きました(図例;1979/03/15)。太陽がとても「意地悪な顔つき」をしています。一羽のブラックバードが草原にいました。何やら餌をついばんでいたのですが、それに向かって太陽が「さっさと、あっちへ行っちゃまえ！」と怒鳴りつけているといったものです。それから、もう一つ、お家の絵の裏側に彼女は自分の指のかたちを描き、またそれと一緒に妙な人物像を描きました(図例;

1979/07/05)。それらについて、彼女が言うには、「小さな赤ちゃんの幽霊よ」といったことです。ハッピーな子どももいるけど、悲しい子どももいるの。何故って、クッキーを貰った子どももいるけど、貰えなかった子どももいるからといったこと。＜母親はクッキーをたった4個しかなかったの。それでクッキーをもらえなかった子どもはコップにミルクをもらったわけ。でもそれって全然欲しいものじゃないよね・・＞と。



「同胞葛藤」は彼女のこころを占めるかなり大きなことであります。休暇の休みがありますと、必ずといっていいほど、その前後に自宅で飼っている金魚が死んだ話をするのでした。先日のセッションでもそうでした(1979/09/20)。この時期、彼女は画用紙にクレヨンでぐじゃぐじゃにして色塗りをしました。大きな金魚が、(このぐらい大きいとそのサイズを示しながら・・)小さいのをいじめて、その尾っぽを食いちぎったと語ってます。そしてその同じ日に、彼女は目が飛び出ているカタツムリを描きました。その傍らには、お腹をすかせて、8つの眼をぎらつかせている「怒れる幽霊」をも追加して描いております(図例；



1979/09/20)。それら幽霊はおそろしげな凝視する眼があり、またおそろしげな大きな口を持っているのです。それらはどうやら彼女が「離乳期」にどれほどの困難を味わったのかをよく表わしているかと思われます。それがわたしとのセッションの終了に向かって、どうやら再び活性化されたといえましょう。そこには不在対象(母親、ここではMiss Yamagami)を必死に追い求めていますのに、絶えず何かがそれを差し止め、邪魔するものがある

ということです。だから「仮想敵なるもの」に始終付き纏われるといったことになりがちなわけです。でも、そもそもの問題とは「不在対象」との‘距離’を越えられないことにあります。かつて(1979/07/05)ローランが紙飛行機をつくって飛ばそうとしながら、それをぐじゃぐじゃに丸めこんで潰したのにも似て・・。そして、たとえ飛べたとしても着陸に失敗してげきは墜落してしまうといったことの怖れが彼女に求めることをたじろがせるのです(1979/09/06)。

もう一つ、ローランが離乳するにあたっての痛苦に対処するすべがあります。それは母親そっくりの「双生児的イメージ」になるというもののようです(1979/06/28)。彼女は＜マジック・ミラー＞と呼ばれるゲーム機を持参しました。そして白い紙の上に鏡に映るものがそのままに投射されるといったものです。だけどそれもどうにもうまくゆきません。それで苛立って＜もうほんとどうしようもないわ I can't stand＞と言います。ほんとうにローランは自分の立ち位置というものがよくわかっていないといえましょう。彼女はほんとに自分でいられるかどうか、オリジナルかつ真正か、もしくは他の誰かのコピーでしかないといったことになるのでしょうか。それでその苛立ちに耐え切れず、さっさと彼女は解決策を考えだします。つまり白い紙をオリジナルな絵の上に重ねてそのコピーを作ったのです。それはトリックなんだと、誰もその秘密は知らないのだと言いました。しかし彼女は自分自身がどこか「ニセモノっばい」ことを承知しているの

です。彼女の母親が新しい仕事(ファッション・デザイン)を得たとき、その職場に一度訪ねたことがあったのですが、その折に母親の上司が彼女に雑誌に載せる写真のモデルになったらどうかしらと言ったんだそうな…。お小遣い稼ぎになる！一つ写真を撮るだけで1ポンドの稼ぎになるんだとか。彼女はひどく興奮します。それをわたしに話している間、彼女はお尻を振り振りさせておりました。いかにもわたしのお尻って可愛いでしょといわんばかりのこびを売るといった動作であります。ローランは勝ち気満々なのです。いつか母親との競争で彼女を追い越してやるといったことです。それは彼女が10歳になったら、乗馬の騎手になるんだという野心を語ったときに、そうした意味合いがあるのは見え見えでした。母親も乗馬をしていたのですが、一度落馬してから乗馬を諦めてしまったとのこと。それにローランは母親が乗馬のレッスンを始めるよりもずっと早く始めたのですから、それだけ勝ち目はあるというもの…。

実際のところ、学校から手渡された通信簿(1979年7月)によりますと、ローランの成長ぶりが幾らかうかがわれます。担任のコメントには、彼女が学習により真面目に専念するようになったとか、責任感も備わってきたように見受けられるとのこと、学級委員をやらせたら、案外悪くなかったとかでした。しかしながら、この自立した‘大きなお姉ちゃん a big-girl’のローランは、どうもしばしばその態度に高飛車なところがあり、強気であり、そしてわざと無関心を装うといったところが少々気になります。例えば、わたしが彼女に将来どんなお仕事をしたいのかと訊いたことがあります、彼女の返答はくそなのあなたの知ったことじゃないでしょ…>というものでした。彼女はとても陰しい顔付きをし、さらにくほんとおとなたちって赤ちゃんみたいよね>って言うのです。幾らか嘲笑的に…。そんなにも、ああだこうだとギャアギャア要求がましい両親がいて、それにMiss Yamagamiもそうだわ。なんてうるさいのかしら。彼らと関係しなくてもよくなったら、どんなに清々するだろうといったところ。ここで、いかにも彼女が提唱するところの「逆さまの思考Upside Down Thinking」が想起されます(1979/03/22)。それは、彼女が君臨する「ナンセンスの国Nonsense Land」の言語法なんだそうです。例えば、太陽は実際のところ月だといったふうに…。そこではローランが‘法律’であり、すべてを思うが儘に決められるといったことのようにです！

彼女にしてみると、自分が母親(またはわたし)ではなく、もう一人別の「ひと person」であるということに気づくことそれ自体が、‘見捨てられた’という感覚を苛烈に湧き起こされることになるようです。つまり自分がしがみ付ける誰もそして何ももはや無いということです。そこで残るはもはや自分の‘親指’だけってわけです。ローランはわたしとのセッションがそろそろ終わりに近づきますと、親指を口に咥えたまま、寝椅子に丸まった恰好で座り込み、そのまま10分から20分ほど眠りこけてしまうことがありました。それを眺めながら、わたしは彼女がいかにもグリム童話の「眠りの森の姫」みたいに思われたのです。彼女の孤独という暗闇のなかに自分を押し込めてしまっており、そこではまったくのところ「愛=よい母親 オッパイ=よい乳首=よい父親ペニス(=プリンス・チャーミングのキス)」が剥奪されている(もしくは禁止されている)わけであります。それは、彼女が‘老いた未婚女性’になるといった悲観的な考えをどこか抱いているのではないかとも思われました。彼女は結婚というものの可能性を全面的に否認しているわけで、例えば、<男って、赤ちゃんみたいじゃないのさ…>とうんざりした顔で言ったりします。事実、

ここで問題となるのは、彼女のころのなかでは「繋がり」と言うものなのです。‘触れ合い’とも‘交わり’とも言っていていいでしょうが…。それはあまりにも危険を孕むものなのです。たとえば、彼女の「親指」ですが、彼女があまりに過剰にしゃぶったり、時には噛んだりするものだから、毒をもつに至ったといったこと(1979/05/18)。ここでは、口＝ヴァギナ、親指＝父親ペニスであり、いずれにしてもそれらの結合は剣呑至極となりましょう。そして、「母親オッパイ」をグジャグジャにしてしまうといったこと。例えば、彼女の描いた絵に「投げ矢(ダーツ)」があったのですが、それ(丸い標的)を流し台のところで水浸しにし、それを壁に張り付け、さらにそこに自分の指の爪の先で引っ掻き、それからそれを剥がし、グジャグジャに丸め込んで、それをゴミ箱に投げ捨てたといったことがありました(1979/05/24)。その乱暴狼藉たるや実に凄まじい！

そしてわたしとの最後のセッション(1979/09/20)、その終わりの最後の5分間に彼女が何をしたかといえば、彼女は白い用紙の真ん中に爪で小さな穴を開けたのです。恰も、オッパイなところのわたしの‘乳首’を引き抜いたといったところです。その後彼女が去ったあとによくよく見ますと、その‘乳首’はさらに黒いインクで塗りつぶされており、そしてオッパイなところの画用紙は、流し台の中で水浸しになって無惨にもゴジャゴジャに千切れていたのであります！

わたしはここであることを思い出します。ローランは寝椅子の腕に身をもたせておりました、そして彼女がそこに思い切り押し潰す恰好になったので、その寝椅子の腕が捻れて折れてしまうようでした。彼女は、そうなるって分かってるの…と嘲笑したふうに認めます。わたしがつまり彼女が敢えてそれを傷つけようとしているのかしらと訊くと、ピシャとわたしのこぼをささぎるように、<(椅子に)感情なんてあるはずないでしょ…>と返答します。そこで彼女にそんなふうに自分の感情を殺そうとしているということ、それはわたしの感情についてでもあるわけだが、この別れの時期、言うなれば母親の授乳してくれる膝の上(セッション)から降ろされるといったこと、つまり「離乳」を意味し、それはわれわれ双方にとっていずれもが痛みを感じざるを得ないのだけれども…。セッションが終わるということを何としても認めたくない彼女がいたわけで、それには自分は関わりたくない。自分のあずかり知らぬことにしたい、と彼女は頑なに決めたわけですから。それはそもそもMiss Yamagamiの決定事項であり、わたしは関知したくないと…。それで彼女が去ってゆこうと、「そんなの平気よ！」とたとえ言ったにしろ、ローランのフィーリングは決して平気などではない。彼女はわたしが去ってゆくことを考えることに耐えられないのだ。<先生は、日本だったかしら、どこだったかに帰るんでしょ？>と、彼女は幾らか不確かな表情を浮かべながらそう訊いた。最後のセッションが終わり、わたしは彼女を待合室へと連れて行った。そこで父親に一言二言挨拶を交わした。そのときローランはその待合室に備え付けの漫画本を一冊手にとり、わたしに「さよなら」を言う最後の瞬間まで、読み耽っていた。そして、彼女の「さよなら」には何の感情も伝わってはこなかった。

彼女の最後のセッションはいかにも全く自己破滅的ともいえそうな印象だが、わたしは彼女が「自分というのが真にいかなるものか」、その実態を幾らかでも明らかにしたと信ずる。セッションのなかで明らか

にされたことは、それは明快なほどに真正にしてローランそのものなのであったわけで…。そしてローランがわたしとの間で経験したことから何かしら意味を見出すことで心の内に‘つかえ棒’を得るということがあるのではないか、そう期待したい。彼女の将来においてそれが引き継がれて、己をよりよくコンティンできるようになるためにも…。

わたしは個人的にはローランに対して感謝の念を抱いている。振り返って、治療がどれほど大変であったかを思うとき、彼女が‘正直であった’ということは認めていい。その彼女のこころの深底においてどれほどの悲嘆を抱えもつものであったのか、それを彼女はわたしと分かち合った。そして、それが彼女にとって決して決して楽なことではなかったということを、わたしは感じるばかりである。

Chizuko Yamagami

■ 後記

「タヴィストック」で2年間に亘るローランの治療を巡ってどれほどの人たちが関与したかを思うとき、実に感慨深い。Educational PsychologistのMrs. Osborne がローランの学校の担任と折々に連絡を取り合った。PSWのMr. Trucleがローランの両親との面談に当たった。それは定期的ではなかったけれども…。そしてわたしがローランのセラピー・セッションを担当し、並行してMrs. Margaret Rustinがスーパーヴァイザーとしてわたしを支援してくれていた。これら立場の異なるそれぞれ職業人（プロフェッショナル）がローランのために費やした労力は莫大なものである。「タヴィストック」のサービスはNHS(健康保険/National Health Service)だから、すべて無料である。それほどの‘投資’だとしたら、断じて彼女の治療が単なる‘食い散らかし’で終わっていいはずはないのだ。

ところで、此の度40年を経て彼女のファイルを開いたときの衝撃は、とても言葉にならない。ギョッとした！お家の絵が無惨に切り裂かれている。無意味ななぐり書きやら、水浸しになってそのままひからびた画用紙が幾つも重なり合ってベタッと引っ付いている。切り絵細工の破片もこぼれ落ちた。悪鬼ともみえる、奇怪な幽霊たちがあちらこちらで飛び跳ねている図もあった！でも大概のところ描画はお粗末で、そこには何ら見るべきものが無い。ローランに‘アッカンペー！’された気分だった。何という食い散らかしか！この破廉恥さは何だ、と一瞬呆然とした。

ローランの両親はまだまだ「青年期」にあって、それぞれ‘自己実現’に忙しかった。母親はファッションデザインの仕事に忙殺され、父親はPTAやら地域でのボランティア活動などに首を突っ込んでいた。彼らはそれぞれ親に怨恨を隠し持っている。母親は自分よりも弟のほうが可愛がられたと親を恨んでいた。父親は幾らか抑うつ的な人で、親を育て方が悪かったと恨んでいた。だが、事実としてはどちらも親に認められたがっていた。それは間違いない。だが、自分たちの娘二人が同じく‘認められたがっている’ことはまるで把握できずにいた。彼女らがどんなふうか、その気持ちはといったことなど、ほとんど

彼らのまなざしに何も映っていないかのようなのだった。当然だろう。事実誕生間もなくから母方の祖母に養育を任せ、そしてある程度育った時点では日常的に住み込みのオペアー(Au Pair)の女の子に適当に子どもらの世話を託している。彼らはどうやら‘反抗期’を尚も引き摺っていたせいも、当然ながら「タヴィストック」という‘権威’にもそれは無意識ながら転移されていたふうで、買い物でうっかり時間を忘れてしまったとやらその他、理由はさまざまだが、娘らのセッションのキャンセルやら大幅な遅刻といった結果を招くことがよくあった。とぼっちりはいつも子どもたちだった。

さて、ここで‘阿修羅のごとき’ローランの治療経過を振り返り、概括しよう。ローランにおいて「自慰空想」への耽溺は執拗で、なかなか歯止めが利かず、そこから一見して破廉恥極まりない症例といった印象は拭えないわけだが。そこには瞠目すべき変化がある。それは彼女の内なる「結合両親像」の変容を辿ってゆくとわかりやすい。その象徴としてあるのが、まず最初が「腐った木の株」である。これが彼女に取り込まれ、彼女自身が‘萎れて生気を失った草花’になっていた。ところが、いつしかこの「結合両親像」は騎馬レースの「優勝カップ」になり、それをめざしてジョッキー(騎手)としてのローランは奮戦するといったことになっている。特にここでの眼目とは、「父親ペニス」が尿道愛的攻撃性にさらされて、無惨にも腑抜けて役立たずになっていたものが、どうやらその生気が蘇ったかのようで、復活していること！ここに「いのちの背き(死の衝動)」が、「いのちが奮い立つ(生の衝動)」へと変換されたことが注目されよう。しかしながらまだまだこれから先、いのちを愚弄・嘲笑し、かつ痛み付けるといった「ニヒリズム」及び「サディズム」との闘いが求められよう。さてさて、彼女がその端緒についたといえるかどうかののだが。後のことは学校での交友関係に期待できそうに思えた。どうやらローランはクラスで女の子らのグループの一人になっているらしい。そこで彼女がボス面して威張っているということでは全然ないみたいで、自分よりも成績のいい子らともどうやらうまく折り合っているらしい。そんなふうにならぬ女子同士、互いにぶつかり合い、押し合い圧し合いしながら揉まれて、やがてローランも自分の収まりどころを会得することを期待したい。それでいつか誰かに好かれるということも大事に思えるようになるのではなかろうか。

ある意味、ローランは両親と同じ轍を踏んでいる。彼らは自分が貶められたと思い、その矮小感に打ちひしがれていた。そして憤然として何としても認められたいと抗っていた。彼らにとっての自己実現への意欲はすなわち自己顕示欲でもあった。その野心的果敢さは遮二無二であり、手段を選ばず、かつ無慈悲ともなる。そして充たされない思いでいつも苛立っていた。確かに彼女の学校からの通信簿は、その学習意欲やら責任感を評価していた。かつてあの萎れて根腐れを起こしていたローランがついに覇気も生気も取り戻したのは大いに結構だが、もしかしらわたしたちはこうして寄ってたかって一人の‘野心家’を育てただけなのではないかと、内心ギグツと一瞬痛みを覚えた。さて、そこにどんな意味を思えばいいのかと…。しばし考えあぐねた。これがはたして成功例か失敗例かと論議することでもないが…。

何だか、この症例を終えてみて、わたしは「トイレット・トレーニング」を済ませたような親の気持ちを思った。もう濡れたおむつを取り替えることもせず済むわけだ。きれいなパンツを履かせて、ローランにくさ

あ、あなたはもう立派なお姉ちゃんよね>と。。自慢していいではないか。だが、ふと思う。子どもを大きくするとは、‘厄介払い’することなのかと。成長(自立)を促し、<さあ、自分でしてごらん。。>と親が子どもに言う。それはすなわち親の厄介を片付けたこと、そんなふうに親の手間隙を省くことにはならないか。<自分のことは自分で始末するのよ>、そう言われて、そのとおりに子どもはなる。それが‘健全な子ども’ということ。だが、このローラン、そしてその妹で利かん気の強い、暴れん坊のナオミもそうだが、まさにそうした親の‘手抜き’に徹底抗戦したともいえる！そして彼女らは親の手に余る実に‘厄介者’になった。だが、彼ら親は自分たちの‘厄介者’である娘らを母方の祖母を始めとして、学校やらタヴィストックやらあちこち第三者に^{たらい}盥回しにするだけであった。明らかに子どもらは親の‘盲点’を衝いている。この袋小路！であるからして、事はさほどにややこしく、彼らに関わる誰もがうんざりするのであった。報われないといった気分。そして最後には、<やることはやった。。>とプロフェッショナルとしての自負を取り敢えず立て直すであった。だがほんとにそれだけかしら。なぜか悔いるものが残る。ほっこりしない気分なのだ。そして、あっそうかと思う。彼女は、<ローラン、大好きよ！>とわたしに言われたかったのではなかったかと。。ああ、そうなんだ！それを言えたらどんなに良かったろう。遅蒔きながら、それをここで言おう！<ローラン、あなたをわたしの心のうちにギュッと抱きしめる>と。。

(2018/02/02 記)